

女子大生に見る留学を通しての家事に対する意識

宮房寿美子・杉橋朝子・セージ, クリスティー

Perceptions and Position of Japanese Female University Students towards Housework

Sumiko Miyafusa, Tomoko Sugihashi and Kristie Sage

Abstract

This pilot study sought to ascertain the perceptions and position of Japanese female university students towards housework after three semesters of study abroad in the United States. Researcher motivation was based on the persistent global gender gap data of Japan vis-à-vis other nations, and current Japanese government initiatives which encourage increased female participation in the workforce. An online worksheet was shown to students with images of Japanese and Western couples at home. As the female relaxed, the male did the housework. Their reactions were surveyed and comments were elicited. The researchers hypothesized that student awareness would be lower regarding their understanding of cultural differences and the reversal of traditional gender roles. However, they displayed bi-cultural understanding of American cultural norms as compared to the Japanese reality. This highlights the influence of the study abroad experience. The researchers found the study was limited due to the number of students who participated; and propose for future studies the inclusion of a larger and more diverse sample, including male university students.

はじめに: 日本における女性の社会進出

女性活用を推進するために、安倍内閣は「輝く女性応援会議」や「World Assembly for Women in Tokyo」(以下、「WAW! 2015」とする)を開催している。「WAW! 2015」では、さまざまな立場や世代の男女が共に協力しながら社会を改革していく目的で、女性の活躍を阻む長時間労働や男女の役割分担意識について、またシングルマザーや非正規雇用の女性について議論が行われた(首相官邸 2015)。このようなイベントが企画される背景には、2014年現在日本で働く女性の56.6%は非正規雇用者であり(総務省統計局 2015)、現実には女性管理職の比率が低かったり、妊娠中にマタニティ・ハラスメントを経験したり、また出産後に復帰をあきらめる女性が多い等の社会問題があげられる(Woman type 2014)。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する内閣府の世論調査(内閣府 2014)によると、「賛成、どちらかといえば賛成」の小計は、前回の調査から増加した年もあるが、調査開始の1992年から全体的な傾向として下回りつつあると読み取れる。「反対、どちらかといえば反対」という考えと比較すると、2014年の調査では49.4%と賛成の小計(44.6%)を上回り、最近の「輝く女性」を後押ししているかに見える。一方で全体的な傾向を見ると、2004、2007、2009、2014

年の調査では反対が上回るものの、1992、1997、2012年の調査では賛成が上回る、と変動を繰り返す、依然「家庭は女性が守るもの」という考えが根強いことが窺える。2014年の対象は、女性1,692人、男性1,345人であり、年齢分布は20～29歳228人、30～39歳406人、40～49歳501人、50～59歳522人、60～69歳680人、70歳以上700人であった。「賛成」を支持したのは、70歳以上の女性と60歳男性が多く、「反対」を支持したのは、20代と50代の女性が多かった。

下の図1、図2はOECD発表の2010年におけるアメリカと2011年における日本の1日あたりの労働時間の男女差を示すものである。下の数字は「分」を表している。

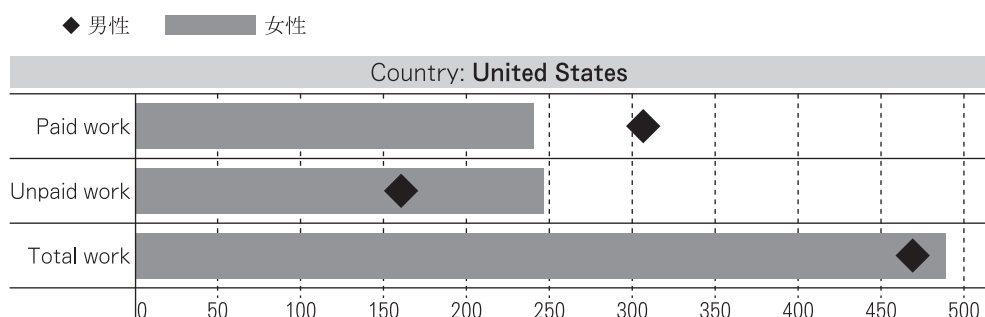


図1 「アメリカの労働時間調査 (2010年)」

出典: OECD Web サイト

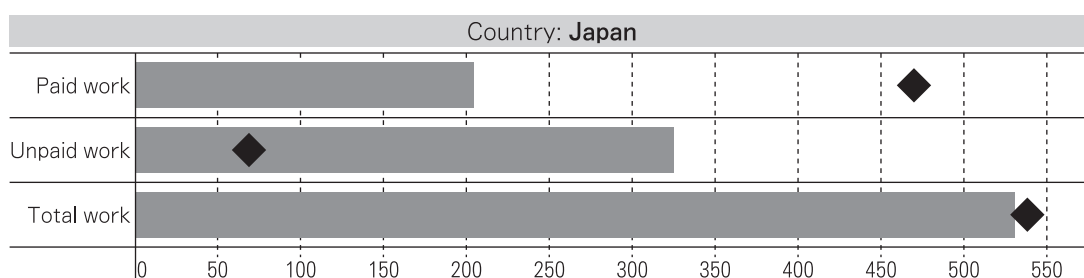


図2 「日本の労働時間調査 (2011年)」

出典: OECD Web サイト

四角 (◆) が男性、横棒線が女性の従事時間を示す。男女差を見ると、労働合計時間はアメリカも日本も余り差がない (Total work 各図の下段) が、報酬を受け取る仕事 (Paid work) に従事するか、報酬のない労働、つまり家事労働に時間を費やすか、で状況が異なっている。アメリカ人男性の家事労働時間 (約160分) はおよそ女性 (約245分) の3分の2だが、日本人男性 (約65分) はおよそ女性 (約325分) の5分の1の家事労働時間である。この両国の違いについて、留学を通して経験する学生たちは、家事労働をどう捉えるのだろうか。

昭和女子大学の英語コミュニケーション学科 (以下、英コミと略記) の学生は少なくとも1学期間の海外留学を卒業単位の一部としている。日本社会以外の地域で長期間生活をした彼女たちは、家事労働に対してどのような意識を抱くようになったのだろうか。

1 研究の目的

本研究では、2013年1年次の秋学期から3学期間の留学を経験した英コミの学生を対象にアンケートを実施し、長期留学を経た女子大生のアメリカ社会と日本社会における家事に対する意識について

て調査・分析し、また海外生活を経験したことによる変化について考察する。

具体的な研究課題は以下の通りである。

- a) 3学期間の留學生活で家事の役割についての意識変化があるか。
- b) 海外に滞在して見えてくる日本の家事とジェンダーの役割はどのようなものがあり、自身に影響したか。

2 先行研究

2.1 留學を通しての自己形成

近年日本の高等教育が特に推進しているのは、大学生に対し国際化に向けて海外での授業を推奨し、深い専門知識や外国語の習得にも力を入れている (Yonezawa, Akiba, Hirouchi 2009) 点である。海外留學に関して Jessup-Anger (2008) は、学部生の留學時期の自己形成は思春期の自己形成過程と類似している、としている。彼の言葉を引用すると、

留學は他の文化について理解を深めると同時に、自己形成にも影響していることがある。留學生が現地でどのような異文化を体験しているのかを理解することにより、学生の自己形成の発達と問題意識についての有益な情報を提供することができる (Jessup-Anger 2008: 360)。筆者ら訳

Jessup-Anger (2008) の研究によると、留學前、学生は母国の文化からジェンダーについてのある程度の理解はあると考察している。それは、女性らしさや男性らしさについての理解であり、特に問題意識を持ってはいない。しかし、学生が留學を経験すると、日本で生活していた時以上にジェンダーに関する知識や経験が深まり、またその問題意識について視野が広がるということが明らかにされている (Jessup-Anger 2008 から Grewal & Kapan 2002 を引用)。

2.2 アジア社会におけるジェンダーとその文化

Kim (2014) は、アジア社会と欧米における男女の役割には類似点があると唱えている。その理由は、若い女性は自分自身の独立した生活を比較的自由に求め、社会集団の中では流動的であり、仕事やキャリア意識が高いことが窺えるからである。その結果、彼女たちはより多くの経済力を持ち、家族からも独立し、さらに自己実現のための時間やエネルギーを有効に活用しているとする。さらに、アジア社会で英語の話せる女性は、移り変わりの多い文化を理解し、より良い社会を作るためにさまざまな事柄について意欲を見せている (Kim 2014)。しかしながら、Kim (2014) によると韓国や日本を含めたアジア諸国では、労働における女性の不当な扱いのために、社会参加が制限されたり、社会的に不利な立場に立たされることがある。

日本では、産休育休の制度が進んだため出産後の復帰と復帰後の就労環境がより整いつつあるが、産休前とは異なる部署に不本意ながら異動させられたり、時短制度利用により評価や賃金が下がってしまうことがある (Woman type 2014)。さらに男女格差は先進国でありながら、なかなか改善しない。

日本社会における女性の立場は、改善すべき点があり、常に問題意識を持って社会を見直す必要がある。留學を通じて自己形成を遂げて帰国した女子大生たちは、そう遠くない将来に持つであろう家庭の中での家事についてどのように考えているのだろうか。

3 研究方法

3.1 調査対象学生

本研究は、日本の女子大生が留学経験を通してジェンダーのイメージや家事の意識を考察するパイロットスタディである。本研究の参加者たちはワークシートに掲載された写真を4段階で評価し、写真についてのコメントを加えた。今回は、主に回答された文章を分析する記述的研究を行った(Patton 2002)。対象は英コミ学生21名で、1年次後期から2年次後期終了時まで計3学期間、アメリカのボストン他、昭和女子大学が協定を結んでいる英語圏の大学に留学をして帰国した。

プログラムの期間は2013年9月～2015年2月であり、最初の2学期間は全員が昭和ボストン校にて授業を履修した。昭和ボストン校では、現地で読まれている英語話者用の小説、新聞、雑誌や映画を用いた学習でより実践的に英語の4スキルを学んだ。また、フィールドトリップやボランティア活動など、異文化を実体験できるスケジュールをこなした。選択科目は、「世界の地理学」、「政治システム」、「グローバルマーケティングの文化」、「アメリカから見た日本」などがあり、学生は世界中の共通点や相違点を学んだ。他にも、コミュニティサービスやNPO団体の活動も含まれ、活動を通じて英語力や必要な知識を増やす機会を持つことができた。

昭和ボストン校ではゲストスピーカーを招いて講演会も実施しており、現地で活躍する企業家、政治家、教育関係者等が講義を行う。週末にはハロウィンやサンクスギビングなどのイベントを企画し、現地の大学生や家族とグループを作って定期的に会い、英語で交流を深めた。また夏季・冬季休暇期間中は、現地の小・中学校で日本文化を教えたり、他国からの学生が多い語学学校のコースやホームステイに参加したりするなど、国際交流を体験できるプログラムに参加した。

3.2 調査方法

本研究の共同研究者は、対象学生の履修する授業を担当したこともあり、帰国時のガイダンス時にフォーマルな形式で調査目的を説明した。学生は回答されたデータが研究のために使用されることを理解し、協力依頼のための同意書に署名した。署名された同意書を回収後、記述形式のワークシートについて説明を行った。本研究のデータ分析は、主にインターネットからの画像を使用し、社会的な側面から分析するために批判的言説分析の方法で行った(Wodak & Meyer 2009)。ワークシートの回答と先行研究を照らし合わせながら、カテゴリーごとに分類し、記述した。

2015年6月に東京校にてWeb(Google Form)を用い、大学のポータルサイトであるUP SHOWAを通じて呼びかけワークシート調査を実施した。ワークシートには、図3、図4のようなヨーロッパ系の男女の写真を2枚、また日本人の男女を2枚、計4枚の写真を掲載した。

全ての写真に共通していることは、「男性は家事(掃除、またはアイロンがけ)を行っているが、パートナーと見られる女性は新聞を読んだり、ソファに座ってくつろいでいたりしている」状況である。それぞれの写真について、「適切さの意識を1から4までの数値で判断し選択する」、「その選択に対する理由や説明の自由記述を行う」の二つの回答を問う形式で、合計8問である。全ての質問は英語で記載し、自由記述は日本語でも英語でも回答可能とした。プログラムに参加した21名のうち19名から回答を得た。

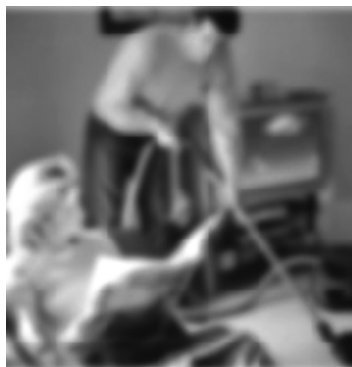


図3 ワークシート内の写真 (Photo 1)



図4 ワークシート内の写真 (Photo 3)

4 結果と考察

選択肢の回答結果から見ていく。表1は、各4枚の写真が学生に与えた印象を1（普通であり好ましい: Normal & comfortable）から4（奇妙で不快に感じる: Odd & uncomfortable）の4段階で評価した結果である。数値は回答した学生数を示しており、例えばPhoto 1（図3参照）を見て、「1」と答えた学生が5名いたことを示している。

表1 各写真の印象の回答者数（名）

	1	2	3	4
	Normal & comfortable		Odd & uncomfortable	
Photo 1（西洋人男性が掃除）	5	11	3	0
Photo 2（日本人男性が掃除）	4	10	5	0
Photo 3（日本人男性がアイロンがけ）	5	10	4	0
Photo 4（西洋人男性がアイロンがけ）	3	10	5	1

多くの学生が1もしくは2と回答しており、男性が家事をすることに対し、「普通」、「やや普通」と捉えている。3の「やや奇妙で少し不快」と感じる学生はそれぞれ3ないし5名（16～26%）で、4の「奇妙で不快」と回答した学生はPhoto 4の1名のみである。西洋人男性、日本人男性の差は特に見られない。

次に、全ての自由記述の回答表現をA 通常の光景、B 不快な光景、C-1 ステレオタイプ、C-2 ステレオタイプからの脱却、D 将来への要望、E 考え方・価値観、F 表情からの感情、とカテゴリー別に分類した（表2参照）。それぞれのカテゴリーは、肯定、否定、または中立的な立場に分類し、分析結果を記載した。

表2 写真の印象についての回答カテゴリーとその意識

カテゴリー	肯定・否定・中立
A 通常の光景	肯定・中立
B 不快な光景	否定
C-1 ステレオタイプ	否定
C-2 ステレオタイプからの脱却	肯定・中立
D 将来への要望	肯定・中立
E 考え方・価値観	肯定・否定・中立
F 表情からの感情	肯定・否定

分析結果と回答を以下に示す。左端の番号は、記入した学生を示している。またカテゴリー別に示しているコメントは英語および日本語で記載されているが、学生の文法やスペリングを修正することなく、そのまま記載している。

4.1 A 通常の光景（肯定・中立）

回答の中には、「日本全体を見ると普通の光景ではないかもしれない」との記載も見られたが、被験者の50%以上が男性が家事をすることは普通、または適切であると回答している。実際に、学生の父親が家でアイロンをかけるので、写真は日常の光景であり、また性別に関わりなく、衣類は自分自身で管理するべきとの意見があった。日本の事情は述べず、海外では家事を分担するのが通常との回答も見られた。

- 2) First, I thought this is wonderful because many men prefer taking a rest instead of doing house works, especially in Japan, However, I believe that there are some men who like to take responsibilities of housework.
- 3) It's also normal. They wear aprons, so I can understand they do housework together.
- 5) Because the shirt seems to be his and he should/can take care of himself.
- 6) It's usual because people living in foreign countries always help each other.
- 7) My father does.
- 9) I think it shows equality of gender, so I feel it's comfortable to see it.
- 11) They look happy, so I feel comfortable and normal.
- 15) 自分の家では、基本父がアイロンをかけるのであまり違和感を感じません。
- 16) 現代では男女の家事分担に決まりがなくなったから。
- 19) My dad does house work so I don't think it's odd.

2) には、「特に日本で男性が率先して家事をすることは素晴らしいと思う。少数ではあるが、家事をする男性がいると思う。」と現代の日本社会における男女の役割を理解した上での肯定的な意味が含まれる。

4.2 B 不快な光景（否定）

男性のみがアイロンがけをしたり、掃除をしたりして女性が何もしていないことに不快に感じる、という回答もあげられた。その多くの理由としては、女性が何もせずにソファに座っている姿が協力的でないと感じたり、女性が男性に掃除を強要しているような印象を持ったことが考えられる。

- 3) It's not too comfortable, but still it is. However, if this wife always doesn't do housework at all, it would be uncomfortable.
- 8) It is a little bit uncomfortable. I guess the woman forces to the men to do house work.
- 13) I don't know I think it does not look fair that only one of them is working and they should turn the TV off.
- 17) I feel odd to the photo, because the woman does not corporative. But if she also work for other house work, the photo is not uncomfortable.

協力的ではない、または男性と平等に家事をしていない女性に対し、不快な感情を持った学生がいたことがわかる。

4.3 C-1 ステレオタイプ（否定）

この回答の中には、いわゆるステレオタイプである「女性が家事をすることが一般的」という考え方が見られた。10)「なぜかはわからないけれど、男性がアイロンがけをしているのは不快である。男性はアイロンがけできるの？」と驚きを略語にして表現した学生がいた。これは、必ずしも留学経験が女性と男性の家事における役割分担の考え方について影響していないことを示している。

- 10) ... it might be more comfortable if he would read newspaper and she would cleanup...Doing iron would be more uncomfortable if Men do. I do not know why though, are they able to do iron? Lol
- 17) I feel a little bit weird to the picture. Because it doesn't look fair that only man are working. But it is OK, if the woman usually do house work too.

日本社会には「女性の社会進出」を進めているのであれば、男性が家事を率先して行う必要があるのではないか（日経デュアル 2015）とする傾向があるが、10) の回答からは共同生活をする男女のワークライフバランスの意識の持ち方についてそのような表現は見られなかった。一方、17) は But it is OK, if the woman usually do house work too.と述べている。つまり、家事をシェアした方がよいという意見も見られた。

4.4 C-2 ステレオタイプからの脱却（肯定・中立）

一方、通常の生活からもステレオタイプとは異なる光景を見た、といった内容の回答があった。以下の2)には「(留学中に)女性が家事をしなくてもよい家族をたくさん見た」こともあり、女性が家事をするというステレオタイプの考え方を変えたと述べられている。また、6)に関しては、「日本では妻への協力は少ないため、夫が家事をすることがstrangeと感じてしまう」一方、「若い男性は家事をよくする」と、ステレオタイプとは異なる現象を理解していることも読み取れる。

- 2) I have seen many family styles and it got rid of usual stereotypes that women have to do house work.
- 6) This is true that they have same image, but I think Japanese doesn't have corporation for their wife. So, when I see man who are willing to help their wife, sometimes I feel it's strange and they don't have stereotype for women...I think many young man don't have stereotype for helping woman than old man. So, it's usual.
- 14) This husband looks so cooperative. I think this pic is breaking the image of gender stereotypes.

3学期間の長期留学を通して、学生はさまざまな家族構成を見ることができ、日本と海外での男女の役割の違いを経験したようである。また、6)のように家庭で男女が協力して家事をするべきという意識の変化、および、それを目の当たりにすると違和感があるとの自己理解が見られた。

4.5 D 将来への要望（肯定・中立）

家事を進んで行う日本人男性はまだ少ない、と理解しながらも、将来、写真のような夫婦が協力しながらお互いを支え合う家庭が増えることを望んでいる回答も読み取れた。12)は「多くの国では男性が家事をすることが普通になってきているが、まだ日本ではそうではない。早くそうなってほしい。」

と述べており、14)は「日本もそれぞれの家庭でこの(写真の)ような状況になる必要がある。」と回答している。

- 1) It's pretty normal in the US (for men to do housework) and I would like to have such a family.
- 4) 自分の家で写真の状況はあり得ないが、自分が将来家庭を持ったら自分だけでなく旦那と一緒に家事ができればいいと思うから。
- 12) It's getting usual to many countries for man to do houseworks! But probably still not in Japan!! I hope it'll change soon.
- 14) Japan also needs to have this situation in each family.

4)「...将来家庭を持ったら自分だけでなく旦那と一緒に家事ができればいい」と述べた回答からは、男女が家事を助け合っている光景を見て、憧れを抱いていることがわかる。また全体的には、日本における女性の社会進出は活発になってきているが、学生の回答からも男性の家事労働を進めていくような、より積極的な意識変革が行われるべき、といった内容が含まれている。

4.6 E 考え方・価値観(肯定・否定・中立)

留学中に授業で学んだジェンダーの知識や、ホームステイやその他の国際交流で身についた考え方や価値観を分類すると、学生間の意識変化が窺える。肯定的な意見としては、以下の意見が含まれる。

- 1) During the studying abroad, I learned that father should help thierwife's housework.
- 11) House duties depend on houses. Both men and women should do it.
- 12) ...If the woman can earn more or has a heavy job than her partner, then man should do the housework!! It depends on every family.
- 16) 現代では男女の家事分担に決まりが無くなったから。
- 18) Because I have learned about gender issue many times.

また、海外で生活することにより、日本にいた頃とは異なる視点で日本社会について述べた回答も見られた。具体的な意見としては、家の掃除は女性のみがすることではない、日本でも男性の家事が普通になってきている、などが含まれている。

- 15) 日本でも掃除は男女関係なくやるものだと思います。
- 18) Men doing chores has been normal even in japan

日本社会全体が変化する必要があることを理解しながらも、学生の回答からは理想と現実とのギャップに対するジレンマが感じられた。ステレオタイプからの脱却と類似する意見ではあるが、一見、写真の光景は理想的ではあるが、一般社会では普通ではない、との意見も述べられている。

- 2) This couple looks perfect, it might be awkward for social though.

男性がアイロンがけをすることに対してのコメントはなく、むしろその光景は不自然ではないと思っている点は興味深い。内閣府(2014)の調査では、依然として「家庭は女性が守るべき」に賛成する数値が高かった。今回の結果は年齢層も関連しているかもしれないが、家事は男女が協力して行うべきと述べた学生が多かった。

4.7 F 表情からの感情（肯定・否定）

主に見た目から読み取れる感情や表情についてのコメントを以下に並べた。学生の回答時の気分や感情、今までの経験によって感じ方は異なるが、Photo 1 から Photo 3 にかけては比較的、肯定的な回答が多かった。具体的には、夫が優しそう、二人とも笑顔、楽しそう、といったコメントが含まれる。

- 8) The husband must be so kind.
- 13) Because both are smiling.
- 18) Seems like they are having fun

一方、Photo 4 に関しては、疲れているように見えたり、楽しくなさそう、などの否定的な感情が表れていた。そのため、不快に感じたようである。

- 18) Why the man looks so tired?
- 8) The men looks not so fun, so I really feel uncomfortable.

本研究では、西洋人男性が家事を行い西洋人女性が椅子に座っている写真、および日本人男性が家事を行い日本人女性が椅子に座ってくつろいでいる写真を利用した。顔の表情についてのコメントは上記のような結果が見られたが、西洋人か日本人かについての反応の違いは見られなかった。

5 測定結果

被験者数が少ないため参考程度としての測定であるが、各写真において学生が選択した番号の頻度を、カイ二乗検定により比較した。有意水準は5%に設定した。Photo 1 から3までは有意な結果は出なかったが、表3に示されているように、Photo 4 に関しては、 $\chi^2(3, N=19)=9.42$ という有意な結果が見られた。

表3 Photo 4 χ^2 検定

回答	観測度数 N	期待度数 N	残差
1	3	4.8	-1.8
2	10	4.8	5.3
3	5	4.8	0.3
4	1	4.8	-3.8

Note. $N=19$

具体的に Photo 4 のどの回答番号（1~4）の間に有意な差があったかを判定するため、フォローアップ測定を行った。結果は $\chi^2(1, N=19)=7.36, p=(0.024)$ で、 $p<0.05$ となったが、第1種の誤り（Type 1 Error）を避けるため、検定を繰り返した回数で有意水準 α を割った（ $0.05/6=0.0083$ ）ボンフェローニ法を使用した結果 $p=0.009$ という数値が出て、有意差がないことがわかった。

上記の測定結果は、学生のコメントからも裏付けられる。Photo 4 は、比較的若い西洋人男性がアイロンがけをして、西洋人女性はソファに座ってジュースを飲みながらテレビを見ている写真である。1（普通であり好ましい: Normal & comfortable）から4（奇妙で不快に感じる: Odd & uncomfortable）の4段階で評価したうち、2と回答した学生からは、「もし妻の方が家事を全くしないのであれば不

快に感じる。今は不快には感じないが、普通でもない。」「アメリカでは、どちらかというとなりの人がアイロンをかけているイメージがあります。」などと、やや不快感を表している。唯一4と回答した学生は、「男性が楽しくなさそうだから、とても不快に感じます。」と述べている。いずれの回答も、学生にとっては理想的な光景ではなかった。被験者数は少なかったこともあり、回答が2でも4でも、その後続く自由回答の欄には大幅な意見の違いは見られなかった。

6 まとめ

本研究は、パイロットスタディと言うこともあり、被験者数は少なかったが、女子大生の家事における意識について理解することができた。昭和ポストン校および海外の大学での男女の役割に関する授業や、ホームステイなどの経験を通じて、学生たちは社会的にも文化的にも学んだ。また、学生たちは多くのアメリカ人男性が家事をしているのを見てきた。調査結果からは、男性が家事をすることに対し、多くの学生は普通、または適切であると感じていた。回答の中には、「日本も変わりつつある。」や「今の自分の家ではありえない光景であるが、将来は旦那と一緒に家事ができればいい。」など今後の日本社会の前向きな変化を願っている。これらの回答は、本研究の目的である海外に滞在して見えてくる日本の家事とジェンダーの役割はどのようなものがあり、自身に影響したか、にも関連するであろう。男性のみが家事をして女性が何もしないことに不快を感じていた学生がいたものの、男性が家事をすることに対し、奇妙であるとか不快であると感じた学生は少数であった。

この結果は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」（内閣府 2014）の調査と必ずしも一致はしていない。1992年から全体的な傾向として「反対」が下回っているが、男性が家事をすることに対して普通である、と回答した学生の思いとはギャップが見られた。一方、Kim (2014) はアジア地域と西洋とでは男女の役割は類似点があると報告した。被験者の回答を考察すると、日本人男性であろうと、日本人以外の男性であろうと男性の文化や役割に関して特に大きな区別をしていない。つまり、西洋人であるとか日本人であるというコメントは全く見られなかった。この点では、学生の意識が Kim (2014) の方向性と類似していると言えるのではないだろうか。

また、数名の女子大生は、自身の父親がアイロンがけやその他の家事をしているのを日常生活として見ている。したがって、日本人男性が家事をする写真を見ても違和感がなかった。ここから、学生には留学による影響は見られないが、日本社会で男女の家事の役割分担にも変化が起きていることが窺い知れる。東洋経済 Online (2015) は「すべての女性が輝く社会」を提唱する。しかし、それは同時に「すべての男性が家事・育児をする社会」を作ること考えているのだろうか。一方で OECD (2014) の報告では、2011年のアメリカの男女の労働合計時間にはあまり差がないとしながらも、アメリカ人男性の家事労働時間が160分に対し、日本人男性は65分と差が見られる。この点については、日本全体で家事に対する意識について考える必要がある。

言説分析を終えて、これに続く今後の課題について記す。今回はパイロットスタディで被験者数が少なかった分、回答を深く考察することができた。今後、被験者数が多くなれば、多様なコメントや反応が見られ、有用な分析ができるのではないか。また、女子大生のみではなく、男子学生も調査の対象とすれば、同年代の意識についてより深く理解ができるだろう。そこで次回は長期留学プログラムに参加した男女の大学生を調査・分析対象とする。

留学は語学習得だけでなく、さまざまな種類の異文化を理解することにより自己成長を促したり、

社会の問題意識に目を向けさせるのに有効であることは、学生のコメントからも明らかである。日本を離れたからこそ見えてくる日本文化や社会への視点があるだろう。今回の調査では、女子大生の考える女性と男性の家事における役割について焦点を当てている。学生には今後も留学を勧めると同時に社会問題にも常に目を向けてほしいと願っている。また、教員として異文化理解の知識を深めるとともに、今後の日本を支える女子大生のリーダーシップ育成も目指したい。

参考文献

- Jessup-Anger, J. E. (2008). Gender observations and study abroad: How students reconcile cross-cultural differences related to gender. *Journal of College Student Development*, 49, 360-373.
- Kim, Y. (2014). Asian women audiences, Asian popular culture, and media globalization. In C. Carter, L. Steiner, & L. McLaughlin (Eds.), *Routledge companion to media & gender*. Routledge, 46, 503-522.
- OECD (2014). Time spent in unpaid, paid and total work, by sex. 9/19/2015 <http://www.oecd.org/gender/data/timespentinunpaidpaidandtotalworkbysex.htm>
- Patton, M. Q. (2002). *Qualitative research and evaluation methods* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage Publications
- Wodak, R., & Meyer, M. (2009). *Methods of critical discourse analysis* (2nd ed.). London: Sage Publications
- Woman type (2014) 「女子力を磨くより、稼ぐ力を身に付けなさい！」上野千鶴子さんが描く、働く女の未来予想図 女の転職@type 9/3/2015 <http://womantype.jp/mag/archives/25053>
- Yonezawa, A., Akiba, H., & Hirouchi, D. (2009). Japanese university leader's perceptions of internationalization: The role of government in review and support. *Journal of Studies in International Education* 13: 125-142.
- 首相官邸 (2015) すべての女性が輝く社会づくり 9/17/2015 http://www.kantei.go.jp/jp/headline/josei_link.html
- 総務省統計局 (2015) 労働力調査 (基本集計) 平成 26 年 (2014 年) 平均 (速報) 9/3/2015 <http://www.stat.go.jp/data/roudou/rireki/nen/ft/pdf/2014.pdf>
- 東洋経済 Online (2015) 男性も家事・育児をする社会をつくろうよ！ 9/20/2015 <http://toyokeizai.net/articles/-/70611>
- 内閣府 (2014) 世論調査報告書平成 26 年 8 月調査: 女性の活躍推進に関する世論調査 9/3/2015 <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/zh/z01.html>
- 日経デュアル (2015) 女は社会進出したが、男は「家庭進出」していない 8/16/2015 <http://www.nikkei.com/article/DGXMZO84584520Z10C15A3000000/>

(みやふさ すみこ 英語コミュニケーション学科)

(すぎはし ともこ 英語コミュニケーション学科)

(クリスティーン・セージ 英語コミュニケーション学科)